



TITLE:

<書評>里見龍樹著『「海に住まうこと」の民族誌--ソロモン諸島マライタ島北部における社会的動態と自然環境』風響社、2017年、5,000円+税、428頁

AUTHOR(S):

河野, 正治

CITATION:

河野, 正治. <書評>里見龍樹著『「海に住まうこと」の民族誌--ソロモン諸島マライタ島北部における社会的動態と自然環境』風響社、2017年、5,000円+税、428頁. コンタクト・ゾーン 2018, 10(2018): 384-391

ISSUE DATE:

2018-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/232979>

RIGHT:

里見龍樹著

『「海に住まうこと」の民族誌 ——ソロモン諸島マライタ島北部における 社会的動態と自然環境』

風響社、2017 年、5,000 円＋税、428 頁

河野正治

本書は、メラネシア・ソロモン諸島のマライタ島北東岸においてアシまたはラウと呼ばれる人々（以下、アシの人々とする）が営む独特な海上居住——現地語で「海に住まうこと」——を対象とし、居住＝生活の様態を揺れ動きや潜在的な変化に満ちたものとして記述・分析する民族誌である。現地調査にもとづく丹念な記述は、著者自らが作成した精巧な図や、著者が撮影した豊富な写真によって補完される。本書は人類学における最新の理論的動向を十分に意識して書かれた民族誌であり、オセアニア地域の個別的な事例研究を超えて、人類学の一般理論に関心を持つ読者にも満足できる作品となっている。

本書の対象であるアシの人々は、海上に岩を積み上げて築いた人工島に居住空間を建設し、そこで生活を営むということを繰り返してきた。著者によれば、今日では新たな島の建設や既存の島の拡張が行われる反面、マライタ島本島などに人々が移住した結果、無人となった島も少なくない。本書は、移住と定住の歴史、キリスト教受容や植民地主義などの歴史的变化、生業を通じた人々の環境との関わり方といった諸条件に注目し、人工島での海上居住の現状をめぐるアシの人々の生の様態を描くものである。

本書の民族誌的な記述は一貫して、フィールドワーク初期以来の著者の気づきと、それを精緻に概念化しようとする著者の真摯な姿勢に支えられる。著者によると、「海の民」とされるアシの人々は今日において、マライタ島の内陸部に移住して「山の民」になる構想を語り、あるいは、自らの出自を内陸部に求め、かつては内陸部に居住する「山の民」であったと力説する。アシの人々は「海の民」としての明確な自己規定という想定に反して、それとはまったく異なる居住＝生活のあり方を想像しつつ現在の居住＝生活を続けるという二面的な生を営む。著者はこのような気づきから「静的にも見えるこの人々の生活が実際には、「われわれはどこで、どのように住まうべきなのか」ということをめぐる不

断の揺れ動きのうちにある」(4頁:以下、本書の引用頁は数字のみを記載する)こと、その居住＝生活の様態が本質的に不安定で動的なものであることを理解するに至ったという。

このように居住＝生活をめぐって異なる可能性が並存することにより、人々の生に揺れ動きや潜在的な変化が内包されるという状況を、著者は「偶有性」(contingency)という概念で捉える。偶有性の概念は、あるものが「そうでしかありえない」ことを表す「必然性」の概念に対して、現にあるものが「別様でありうる」ことを表す。本書は偶有性の概念で民族誌的な諸事例を貫くことにより、アシの人々における「海に住まうこと」を「別様でありうる」ものとして重層的かつ動的に描く。本書は「アシの人々が生きている現在それ自体を、さまざまな可能性が相互に緊張関係を保ちつつ並存する、本質的に重層的で非同一的な、そしてまた、潜在的な変化に満ちたものとして記述する」(44)民族誌である。

*

以下では、本書の構成にしたがって内容を概観する。本書は「はじめに」「序論」とそれに続く7つの章、および「結論」から構成される。

はじめに

序論 別様でありうる「住まうこと」——非同一的な生の民族誌に向けて

第一章 「海に住まうこと」の現在——民族誌的概観

第二章 海を渡り、島々に住まう——移住と人工島群の形成史

第三章 海を渡る生者たちと死者たち——葬制、移住と親族関係

第四章 「カスタム／教会」の景観——現在の中のキリスト教受容史

第五章 夜の海、都市の市場——漁業と「住まうこと」の現状

第六章 生い茂る草木とともに——土地利用と「自然」をめぐる偶有性

第七章 想起されるマーシナ・ルール——「住まうこと」と偶有性の時間

結論

口絵において人工島の景観を映し出す7枚の写真は、アシの人々が海上居住を営んできた人工島という舞台へと読者を誘う。写真や図が豊富に用いられることも本書の特徴である。「はじめに」では、日本で東日本大震災が起きた2011年3月11日、ソロモン諸島でも津波警報が発令され、人工島からマライタ本島へと人々が避難してきたというエピソードが紹介される。著者はこのエピソードを、過去のサイクロン被害の際に人工島から本島へ人々が移住したという出来事に重ね合わせる。それにより、人工島居住をめぐるアシの人々の居住＝生活が本質的に揺らぎを孕むという本書の基本設定が確認される。

序論では、別様な「住まうこと」を描くという本書の課題が、人類学における現代的な課題といかに結び付くのかという点が主に論じられる。1980年代以降における歴史人類学や「文化の客体化」論などの登場により、「明確な地理的・社会的境界と同一性をもった民族集団とその文化という、研究対象についての古典的な想定」(35)は乗り越えられ

たように思える。だが、著者によると、それらの議論において描かれる歴史過程や政治過程は、「集団的な同一性を基盤としている、あるいはつねにそのような同一性を目指す」

(36) という同一性のゲームを記述しているに過ぎず、根底において対象の同一性に関する想定を保持したままである。著者は「同一性の想定から自由な民族誌の可能性」(39) として、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロや箭内匡が展開する「生成」論や、マリリン・ストラザーンが提示する「フラクタル」な記述に言及する。そして、外的な影響により対象の同一性が別の同一性に移行するという変化・動態ではなく、対象の内部に多様な変化や他なるあり方を含む、根本的に非同一的な動きとして、人類学における「変化」の概念を再構成する必要があること、それにより対象の同一性に関する想定を真に乗り越え可能であることが述べられる。本章における「変化」の再構成は、「現にそうであるような状態とさまざまな別様な可能性が、互いを否定し合うことなく並存しているような、根本的に多重的な状態」(44) を表す「偶有性」の概念によって達成される、と著者は論じている。

第一章では、著者の調査拠点である T 村と、その沖合に浮かぶ人工島群に焦点が当てられ、アシの人々が今日までいかに「海に住まって」きたのかが概説される。今日のアシ地域には、本島海岸部に大規模集落が築かれ、その沖合に人工島群が広がるという複合的な居住空間が広く見られる。その典型である T 村は 1970 ～ 1980 年代の人工島群からの移住によって形成された比較的新しい集落であり、多様な出自と複雑な親族関係に特徴づけられる。ただし、今日の T 村においては、こうした集住形態がそれ自体として不安定さを抱えるという感覚が人々に共有されている。同章では、現在におけるアシの人々の居住地が「われわれの住み場所」としての自明性を持たないことが指摘されるなど、以下に続く章の導入として、ある生の様態が別様でありうる生の様態を内包するという、偶有的で非同一的なアシの居住＝生活の一端が示される。

第二章では、祖先が移住を繰り返しながら人工島という居住空間を創出してきた過程に纏わる口頭伝承「アイ・ニ・マエ」が取り上げられ、アシの人々の移住史と、それがアシの人々の居住＝生活に対して持つ含意が検討される。これらの口頭伝承は、父系的氏族における通婚関係と女性の移動、親族間における衝突、戦争への参加や禁忌への違反など「雑多で偶然的な出来事にその都度媒介された、本質的に偶有的なものとして」(112) 祖先たちの移住と定着の過程を語る。そのような偶有的な移住と定着の運動が具象化するものこそ、個別の人工島に他ならない。著者は、口頭伝承と人工島の存在によってこそ、人々の居住＝生活が必然的で正統的なものではなく、過去と現在において別様でありえたという可能性、さらには未来において新たな居住＝生活が再び生じうるという可能性が繰り返しアシの人々に想起されると論じている。

第三章では、前章で検討された「生者」の移動に対し、人工島をめぐる「死者」の移動に焦点が当てられる。同章では聞き取りと文献資料をもとに、キリスト教受容以前のアシの人々における葬制の慣習「トロラエア」——死者の頭蓋骨を切除・補完し、一定期間の後に海上移送して特定の場所に安置するという慣習——が考察される。この葬制には、氏族単位の集合的葬送と、主に女性を対象とする個別的葬送という 2 つの側面があるが、通

常において後者は前者によって後景化された状態にとどまる。集合的葬送には、居住地における個人単位の葬送（一次葬）から、氏族単位の集合的葬送（二次葬から三次葬）という明確な移行があり、個別性の解消と捨象をとまう「死者の集合化を通じた社会的再生産」という先行研究の通説に適合的であるように思える。だが、そうではない。個別的葬送において、婚出した女性は夫方において多様な出自を持つ他の女性たちとともに居住地で埋葬された後（一次葬）、同一氏族単位での集合的葬送（三次葬）に先立って、個別の死者として出身地へと「連れ戻」される（二次葬）。著者の考察によると、こうした女性の葬制と氏族単位の集合的な三次葬は、かつての居住地・氏族と現在の居住地・居住集団とを結び付けるという点で同型的であり、女性の個別的な婚姻・移住とそれに続く男性たちの移住というかつての出来事を反復・再現するものとなっている。著者は、アシの人々における葬制が、現住地である「ここ」をそれとは異なる過去の居住地である「よそ」へと結び付け、アシの人々の居住＝生活が根底において孕む他者性・偶有性を確認させる契機となっていることを論じている。

第四章では、伝統的葬制も含めた「カスタムに従った生活」からキリスト教受容にもとづく「教会に従った生活」への通時的な移行という図式には回収されない、アシの人々の居住＝生活における重層性が示される。キリスト教受容の漸進的な過程には、「カスタム」と「教会」を対立的に捉える論理ではなく、「カスタムに従う人々はカスタムの側にとどまり、教会に行く人々は教会に行けばよい」（213）という容認と峻別の論理が見られた。そのような容認と峻別の論理は、キリスト教徒がマライタ本島海岸部の空間を利用し、祖先崇拜に従う人々が人工島に住まうという空間的な「住み分け」によって、「カスタム」と「教会」が相互に区別されながら並存することを可能にした。1970年代を境として祖先崇拜が断絶し、人工島からマライタ本島への移住が進んだ結果、今日においてアシの人々のほとんどはキリスト教徒であり、「カスタム」から相対的に切り離された人々とみなされている。だが、「教会に従った生活」を送るアシの人々の居住空間には、かつて祖先崇拜の儀礼や死者の埋葬が行われていた儀礼空間「バエ」が巨大な茂みの形で残されるなど、「カスタム」を強く具現する場所や景観が身近にある。そうした事物が過去の「カスタム」をめぐるさまざまな過ちや災いと結び付くことによって、今日成り立っている「教会に従った生活」は不断に問題化される。そのような「カスタム／教会」をめぐる問題化を通してこそ、アシの人々は「居住＝生活や集団的同一性は別様でもありえ、また別様でもありうる」（234）ことを思い起こし、未知で別様な「住まうこと」の可能性を想像し続けると、著者は論じる。

第五章では、アシの人々における主要な現金収入源でもある漁撈活動が検討の対象となる。なお、同章では、通常の聞き取りと観察のみならず、GPS 端末を用いた出漁のトラッキングや、衛星画像上でのトラック・データの分析も交えた多角的な手法が用いられている。今日のT村ではかつての集団的網漁ではなく、灯油ランタンなどの照明器具を用いた夜間の潜水漁が支配的である。この漁場では、人口増加と耕地不足によって商業目的の乱獲が進むことによって、現在の居住＝生活が持続不可能になるのではないかという不安がアシの人々に共有されている。だが、著者による多角的な調査が明らかにするように、

利得目的の無節操な資源利用という姿はそこにはなく、むしろ漁場を浅い海に限定したり、潜水時間を潮汐に沿ったものにしたりなどの形で、漁をしない「余白」を空間的にも時間的にもつねに残すという性質が認められる。著者によると、そのような「余白」は、たとえば「何らかの技術的な変化がもたらされるならば、もっと魚を捕ることは可能である」(285)といった、現在において実現されていない社会経済的な可能性を彼らの漁撈活動の内側に創出する。著者はこのような考察から、アシの人々の漁撈活動自体が彼らの居住＝生活のなかに偶有性を創出しており、現在とは異なる居住＝生活を不断に想像させ続けると論じる。

第六章では、サツマイモ栽培を中心とする自給的な焼畑農耕などの土地利用のあり方が検討される。耕地の休閑を必要とする焼畑農耕では、「土地に手を加える」と同時に「手を加えず、放っておく」という両義的な並存関係が見られる。こうした二面的な土地利用は、ココヤシやサゴヤシなどの「アルトア」——「放っておかれる」有用植物——の場合に顕著である。ただし、現在のT村周辺においては「アルトア」栽培とそれともなう休閑地が減少し、サツマイモやキャッサバが盛んに栽培されている。このような変化は農学的・生態学的な説明において、土地に対する人口圧の増大の結果とされる。だが、著者によると、アシの人々にとっては、これらの畑において「放っておく」側面が薄れ「土地に手を加える」という側面が過剰となった結果、「アルトア」栽培に付随する土地利用の両義的なバランスが失われたことが問題である。このようなバランスの歪みは、アシの人々の居住＝生活に偶有性をもたらしめている。一方では、アシの人々の一部が首都などに一時的な転出をする結果として、残された休閑地が「放っておかれる」休閑地から「単なる茂み」へ転化するという悲観的な可能性がある。他方、マライタ島内陸部や無人の人工島における大きな「茂み」は「アルトア」を植え付けて住まう余地を不断に感じさせ、その地での別様な居住＝生活ができるという肯定的な可能性を示している。著者はこうした検討にもとづき、アシの人々における「住まうこと」の偶有性は、生い茂る草木をとまなう土地利用における両義的な可能性と不可分に結び付いていると論じる。

第七章では、マーシナ・ルール運動を想起するというアシの人々の体験が検討される。マーシナ・ルールとは太平洋戦争直後において、人々が植民地政府に対して法的・政治的自治の要求を繰り返しながら、新たな居住地の建設、集団農園の耕作、氏族の系譜や移住伝承の文書化といった活動を展開した社会運動である。先行研究において、マーシナ・ルールは植民地状況下における闘争・抵抗の運動であったと解釈されてきた。だが、今日のアシの人々が、そのような闘争・抵抗の側面を強調することはない。現在におけるアシの人々はむしろ、「父母や祖父母たちが新たな居住＝生活を実現しようとした試み」(352)という側面を強調する。マーシナ・ルールにおいて実現された「一緒に住まうこと」は、移住などの結果として出自が異なる多数の人々が集住しているというT村の現状——「ごちゃ混ぜ」で「一緒に働くことができない」状態——と明確に対比されて語られる。著者によると、マーシナ・ルールを想起することは、ノスタルジックな理想化にとどまらず、「いったいなぜそのような居住＝生活が可能であったのか？」(372)、「自分たちがこのように一緒になれるとは！」(374)といったように、自らの過去に対する戸惑いや驚きを感じ

じさせる体験でもある。すなわち、かつてのような調和的な居住＝生活を現在において実現しえていないという困惑・落胆と、未来において再びそのような集合的居住＝生活を實現しうるのではないかという期待を同時に感じさせるものとなっている。著者はこうした考察から、マーシナ・ルールの痕跡と反復的な想起が、過去、現在、未来における居住＝生活の多様な可能性を結び付け、アシの人々に「住まうこと」の別様な可能性を想像させると論じている。

結論では、アシの人々の生の様態を非同一的で偶有的な居住＝生活として描いてきた本書の議論が人類学の理論的現状においていかに位置づけられるのか、著者自身による認識が示される。著者によると、本書は、アシの人々が、人工島や「茂み」、漁場の「余白」、かつての「タウン」などといった「〈他なるもの〉」と継続的に向き合うことを通じて、別様な「われわれ」の可能性を生きていること（383）を描く民族誌である。この点において、本書は「われわれはわれわれである」という対象の同一性に関する想定にとらわれた古典的な人類学とは一線を画し、「われわれ」のなかに潜在的な他者性を内包するという対象の非同一性、あるいは「われわれ」自体が他者でありうるという偶有性を記述しようとする試みである。著者は、時間的かつ空間的な存在としての人間のあり方を描く前半部（第二章～第四章）から、人間を超えた〈他なるもの〉との関わりを描く後半部（第五章～第六章）への移行自体が一つの「存在論」（ontology）的な移行を示しており、人類学における存在論的転回への民族誌的応答になっていると主張している。

＊

以下では、本書に対する評者なりの見解を示したい。評者は本書を読み進めながら、評者自身が研究対象とするミクロネシアのポーンペイ島にも、世界遺産に認定されたナン・マドール遺跡という、巨大な岩を積み上げて築かれた無人の人工島群があることを思い出した。これらの人工島群は、一体どのように建設されたのだろうかという謎とともに、かつてそこにあったであろう強大な王朝に関して、島内外の人々にさまざまなイメージを喚起してきた。場所は違えど、本書が対象とするアシにおける無人の人工島群もまた、そこに住む住民たちにさまざまなイメージを喚起する。本書の魅力のひとつは、人工島をめぐる多様なイメージの喚起を記述の射程に収めたこと、つまり人工島やそれに付随する自然環境をめぐる人々がさまざまに想像を掻き立てながら、不安定な居住＝生活を生きる、そのような過程を多面的に描きだした点にあらう。ただし、本書の魅力はそれだけにとどまらない。

対象の同一性に関する想定から離れて、いかに民族誌を書くのか。著者が本書の中心に掲げたこの問いは、おそらくは問い自体に新鮮さがあるわけではなく、むしろ今日において多くの人類学者が一度は考えるような、オーソドックスな問いであらう。本書を語るうえでのキーワードである「動態」や「潜在」という用語も、本書ほどに概念整理ができないにしても、一度は思いつく言葉であらう。だが、対象の同一性から自由な民族誌の試みは、人々自身が同一性や必然性を前提とするような局面が観察される限りにおいて、「人々自身によって否認されてしまいかねない、とらえがたい契機をとらえる試み」（31）であり、容易には遂行しえない。本書は、そのような「とらえがたい契機」としての別様な居

住＝生活を単に素描するにとどまらず、400 頁を超える大著を通して一貫して描き切り、同一性の想定から自由な民族誌を遂行している。本書の価値はそのような民族誌を遂行したこと自体にあり、理論的な課題と民族誌的な記述が一体となった質の高い作品だと評者は考える。

さらに、こうした「とらえがたい契機をとらえる」著者の試みは、単に「文化に抗して書く」[Abu-Lughod 1991] ことにとどまらず、文化と自然の二分法についての概念的な問い直しを含む、人類学の存在論的転回に対して民族誌的に応答するものである。著者自身による別稿の表現を借りるならば、そうした応答は「メラネシアにおける「自然」をいかに概念化し記述するか」[里見 2014: 157] という課題を通して達成される。本書における「自然」とは、「現在の「われわれ」の居住＝生活を越えた領域」(52) として分析的に定位される。著者によると、社会文化的地平（「われわれ」の領域）におけるアシの人々の認識・体験を論じる前半部から、社会文化的地平を超えた「自然」としての他者性（「われわれ」の領域を超え出る存在と関係性）についてのアシの人々の認識・体験を論じる後半部へという、本書における移行自体が「人類学的な「存在論」のありうるかたち」(387) を示しているという。評者の推測にすぎないが、本書におけるこのような移行は、社会学から人類学——社会学では扱えない主題や領域を扱う学問——に移行したという著者の経歴（本書「あとがき」を参照のこと）と無関係ではないのかもしれない。ともあれ、「自然」の概念について考え直すうえで、現地住民が環境と関わりあうなかで創出される「余白」に焦点を当てた著者の議論は、評者にとっては大変刺激的なものであった。

このように完成度の高い本書であるが、評者は同時に多少の違和感も抱いた。具体的には、「副題に言う「社会的動態」と「自然環境」は、相互に結び付き、埋め込み合ったものとして理解されなければならない」(236) という指針の下で一貫して書かれた本書には、民族誌的な「余白」——本書の指針からすれば描く必然性はないが、描かれてもおかしくない事柄に関する民族誌的な記述——があまり見られない。たとえば、本書は居住という主題を扱っていながら、家屋や家具の使い方や作り方、世帯内における社会関係の構築、食事の調理や世帯間の食物交換、子どもの養育や高齢者の介護といった、世帯内で繰り広げられているであろう日常的な出来事やモノや関係性についての記述があまり展開されない。さらに、著者自身は記述のなかに姿を現すものの、現地住民との対話の場面において話の聞き役として登場する程度である。そのため、著者自身がいかにアシの人々と向き合ったのか、またアシの人々がいかに著者という他者と対峙したのかについて、本書から窺い知することはほとんどできない。もちろん、既発表論文をもとにした作品であるという事情や、紙幅の都合に起因するところもあるだろう。だが、民族誌的な「余白」の少なさは、本書が一貫した論理をもって書かれた完成度の高い作品である証左でもある反面、その一貫性が逆に民族誌をさらに豊かにする可能性を阻んでいることも示してはいないだろうか。

くわえて、以下2点はやや些末な点になるが、一応の意見として提示しておきたい。まず、著者は結論において、人工島での海上居住という特殊な生活環境を事例に描きだされ

た居住＝生活の偶有性が、他地域の事例において人々の生の偶有性という契機を民族誌的に探究するための手がかりとなりうると述べている。著者はそこから人類学の一般理論との対話を始めるが、たとえばマライタ島内陸部やソロモン諸島内の別の場所における住民の居住＝生活については、どのような偶有性の契機がありうると想定されるのか。こうした地域研究における具体的な見通しも示しながら、理論的な含意を述べたならば、結論部における著者の議論はさらに説得的なものになったのではあるまいか。

次に、「本書のねらいの一つは、アシにおける、本質的に非同一的で偶有的な「住まうこと」の体験を（中略）一つの「存在論」として示すことにある」（52）と序論で述べられるとはいえ、人類学における存在論的転回への言及が結論まで示されない点については、読者に対してやや不親切であるという印象を受けた。たしかに、序論においては本書がヴィヴェイロス・デ・カストロやストラザーン（存在論的転回において中心的役割を果たした人類学者〔春日 2011: 10〕）の理論的洞察を踏まえた民族誌であることが示されている。だが、本書を理論的に定位するうえで決定的な役割を果たすことを考えると、存在論的転回に関する理論的整理が序論でなされてもよかったように思える。

本書において著者は、社会文化的な地平を扱う前半部から「自然」を扱う後半部への移行を体現してみせたが、著者が主要な関心を寄せる後半部の分量は、前半部の分量に比してやや少なめである。このことは、今後の研究において著者がさらに「自然」について探究を進めることによって、一層の深化が期待できる余地を残しているように思える。評者としては、最先端の理論を丹念な民族誌を通して発展させるという真摯な姿勢をそのままに、著者の研究がさらに進展していくことを期待したい。

<参考文献>

- Abu-Lughod, Lila 1991 Writing Against Culture. In Richard Fox ed., *Recapturing Anthropology: Working in the Present*. Santa Fe: School of American Research Press. pp. 137-162.
- 春日直樹 2011 「序章 人類学の静かな革命——いわゆる存在論的転換」春日直樹編『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』世界思想社、pp. 9-31。
- 里見龍樹 2014 「人類学／民族誌の「自然」への転回——メラネシアからの素描」『現代思想』42(1): 148-161。